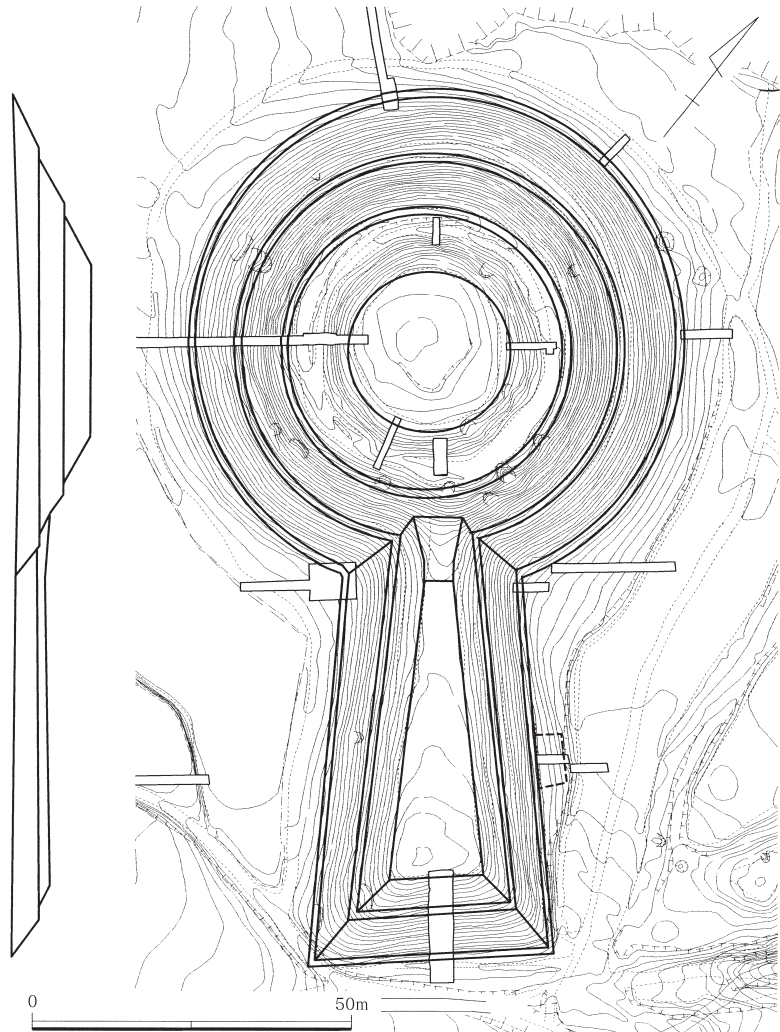


第Ⅲ章 総括

第1節 生目3号墳の墳丘規格について

3号墳にはこれまでの確認調査で、合計19箇所調査区を設定している。3号墳は史跡公園整備計画の中で築造当時の姿に復元する等、大規模な整備計画が無かったため、トレンチ調査を主体とした。墳丘に設定した調査区では何れにおいても葺石面が確認され、各段のテラス、墳丘の周囲のテラスでは礫敷が認められた。さらに、発掘はおこなわれていないものの、前方部2段目平坦面、後円部3段目平坦面では、ピンポールによる試錘を各所でおこなうと、地表面から10~15cm程の位置で礫に遮られる反応がみられ、墳丘最上段も礫敷が施される可能性が高く、墳丘全体を礫で被覆していたと思われる。こういった墳丘全体を礫で覆う行為は古墳群内の生目14号墳でも見られ、古墳群内での施工技術の継承が伺える。段築構造は後円部と前方部のそれぞれ1箇所で見えたのみの、限定的な情報ではあるが、墳丘基底も踏まえ、3号墳の推定復元をおこなったのが第15図である。情報を整理しながら、推定復元図について説明したい。発掘調査以前、3号墳で注目される構造だった後円部上の円形壇とその周囲に巡る幅4.0mのテラスは、後円部3段目斜面に大規模な薬研堀を設け、それが埋まった結果、今日の姿になったと判断される。近年調査を実施した22号墳の後円部上でも、同様のものが確認されており、丘陵南端に存在する南北朝期の記録が残る跡江城跡に関連する施設が、その部分に留まらず丘陵全体に及んでいた可能性がある。段築は前方部が2段築成、後円部が3段築成を採用し、平面形では前方部が下段から2:1.5、後円部が下段から1:1:1.5になると考えられる。調査当初は前方部2段目平坦面と後円部2段目平坦面がそのまま接続すると思っていたが、情報を整理する中で、前方部2段目平坦面より後円部2段目平坦面が、2.0mほど高くなることが明らかになった。墳丘測量図からの情報も合わせると、前方部2段目平坦面からスロープ状の斜道が伸び、後円部に接続していると考えられる。



第15図 墳丘規格復元図 (Scale: 1/1,200)

第6表 3号墳墳丘復元法量

	長さ
墳長(墳丘長)	137m
全長(基底部礫敷帯を含む長さ)	140m
後円部径	77m
前方部長	61m
くびれ部幅	26m
前方部幅	37m
後円部高(A)	11m
前方部高(B)	6m
A-B	5m

推定復元図ではスロープを後円部2段目斜面に接続させているが、これは接続方法の状況が明らかになった生目14号墳(墳長63m)の方法を採用している。一見、中途半端な接続であるが、墳丘全体を礫で被覆する14号墳では、礫自体がスロープ上にも敷かれていることで、スロープから後円部斜面への接続は視覚的には違和感はなく、平坦面に礫敷を施す3号墳も同様の構造になる可能性はある。この他、特徴的な構造として、墳丘基底部の周囲を巡る幅1.5mのテラスがある。平坦面に精巧な礫敷を施しており、当初は墳丘基壇との推測もあったものの、周溝底面に向かう下り斜面に、墳丘基壇を想起させるような傾斜変換が、いず

れの調査区でも認められなかったため、類例のない「基底部礫敷帯」という名称で報告した。3号墳と平面形や主軸方向が酷似する22号墳では、墳丘基底部の基壇上に礫敷を施す構造が調査の中で明らかになっている。これは相互の古墳で施工技術が継承されなかったとも捉えることができるが、古墳の立地も関係しているとも考えられる。墳丘西側側面が崖に面する22号墳に比べ、3号墳は北側が崖に面する以外は広角に土地利用ができたと考えられる。後円部部分の周溝を比較すると、22号墳が後円部半径と周溝幅の比が3:1であるのに対し、3号墳は1.3:1とかなり広く造られている。3号墳は墳丘盛土のための盛土材を幅の広い周溝を設けることで確保し、その分深さは幅の割には浅く、結果的に底面の勾配は緩やかに仕上げられ、墳丘基壇のような立体的な構造を造り上げる必要がなかったと考えられる。つまり3号墳は墳丘基壇を設ける必要がなかったため、墳丘の周囲をテラスのまま仕上げたと思われる。実際に3号墳と22号墳間に施工技術の継承を感じる点に、前方部東側側面の墳丘基底部の「張り出し部」があり、3号墳とほぼ同じ箇所でも22号墳も確認されている。ただし、3号墳の張り出し部が設けられる一帯は、本文中でも述べたように張り出し部を盛土で覆う点等、現在の情報では不可解な点が多数認められ、これら事実の解明のために、将来への追加調査の機会が待たれる。

第2節 生目3号墳の時間的位置付けについて

調査等が行われる以前、生目古墳群は漠然と中期を中心とした首長墓系譜として理解されていたが、1995年、柳沢一男氏は畿内大王墓との墳丘形態の比較により、生目古墳群の首長墓の多くが前期古墳である可能性を指摘した(柳沢1995)。この中で、生目3号墳は行燈山古墳(のち渋谷向山古墳に修正)の3/5規模の相似形墳である可能性が指摘され、前方後円墳集成編年3期に位置付けられている。

しかし近年、柳沢氏は、その後の発掘調査等により新たに得られたデータを基に、生目古墳群を含む南九州の古墳における墳形、時間的位置付けの再検討を行っている(柳沢2011)。その中で生目3号墳については明確な編年観の見直しは行われていないが、やはり発掘調査のデータ等を含め、多角的に、また必要に応じて再度、再々度の検討が必要ということであろう。

これまでの調査において、3号墳での遺物の出土は極めて僅少であり、築造時期の確定に結びつくような良好な資料には恵まれていない。ただし遺物の出土がないことから、逆説的に、生目古墳群内における3号墳の相対的な位置付けに言及することはできる。

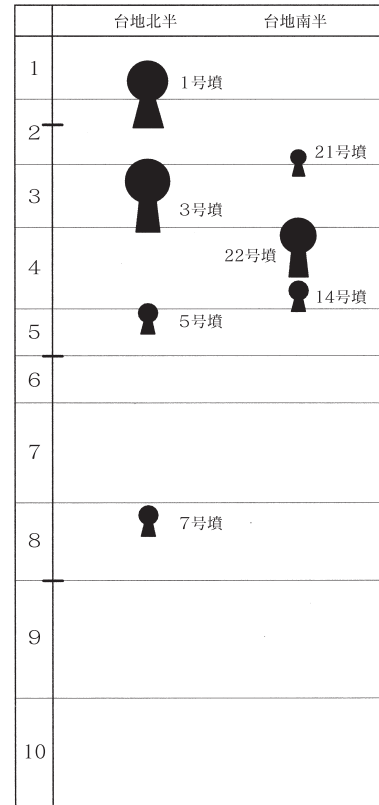
生目古墳群において、あくまで現況ではあるが、3号墳は墳長101mの22号墳と墳形が酷似してい

る。平面形のみならず立面形も酷似しており、3号墳はこの22号墳に近接した時期の築造と見て、ほぼ間違いないと思われる。22号墳は張り出し部より集成編年4期前半に比定される一定量の土師器が出土しており、生目古墳群における編年上の定点となっている。

22号墳では、これまで6本のトレンチによって調査を実施し、周溝内、墳丘斜面、テラス部分において一定量の壺形埴輪（焼成前穿孔の底部穿孔二重口縁壺）片が出土している。出土は後円部に顕著であり、現時点では整理中であるが、ある程度の個数が使用されていたようである。22号墳に後続する14号墳、5号墳でも埴輪列が確認されており、22号墳を前後する段階から、埴輪の一定量の樹立が定着していると見ることができる。

一方の3号墳においては、これまで19ヶ所のトレンチ、調査区を設定しているにもかかわらず、埴輪を含め遺物の出土はまったく見られない。集成編年2期後半から3期に比定される21号墳では、全面的な調査によって数個体分の底部穿孔二重口縁壺が出土しており、22号墳段階における埴輪の多量樹立が行われる以前、少量の壺形埴輪による限定的な埴輪祭祀が行われていた可能性はある。あるいは3号墳でも数個体の埴輪が限定的に用いられている可能性はあるが、これまでの調査面積から勘案して、少なくとも22号墳以降に見られる一定量の樹立は行われていなかったものと判断して良いと思われる。22号墳以降、14号墳、5号墳と一定量の埴輪樹立が生目古墳群の首長墓系譜において定着していることから考えれば、3号墳はこれらに先行する段階に位置付けられる可能性が高い。

以上、墳丘形態の類似度から言えば、3号墳は集成編年4期前半に比定される22号墳に近い時期ではあるものの、これに先行する可能性が高く、現時点における集成編年3期という位置付けは妥当なものと言える。



第16図 生目古墳群における首長墓の変遷

【引用・参考文献】

宮崎市教育委員会 2000『史跡生目古墳群』保存整備事業発掘調査概要報告書Ⅰ 宮崎市文化財調査報告書第42集
 宮崎市教育委員会 2001『史跡生目古墳群』保存整備事業発掘調査概要報告書Ⅱ 宮崎市文化財調査報告書第46集
 宮崎市教育委員会 2006『史跡生目古墳群』保存整備事業発掘調査概要報告書Ⅵ 宮崎市文化財調査報告書第61集
 宮崎市教育委員会 2010『生目古墳群Ⅰ』生目5号墳発掘調査報告書 宮崎市文化財調査報告書第80集
 柳沢一男 1995「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号 宮崎県
 柳沢一男 2011「南九州の出現期古墳」『邪馬台国時代の南九州と近畿』ふたかみ邪馬台国シンポジウム 11 資料集 香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」



図版1
生目3号墳全体
※左手：後円部



図版2
後円部3段目葺石
(3C)



図版3
後円部3段目斜面
葺研堀(3C)



図版4
後円部3段目葺石
(3D)



図版5
後円部1段目テラス
礫敷、2段目斜面
葺石(3D)



図版6
後円部墳丘裾部
※天が墳頂方向
(3D)



図版7
後円部墳丘裾部
(3E)



図版8
後円部墳丘裾部
(3F)



図版9
後円部墳丘裾部
(3G)



図版10
後円部墳丘裾部
(3G)



図版11
くびれ部墳丘裾部
※左が後円部方向
(3L-1)



図版12
くびれ部墳丘裾部
(手前3H-1、奥3H-2)



図版13
前方部墳丘裾部
(3I)



図版14
周溝および周溝
立ち上がり
(3L-2)



図版15
周溝および周溝
立ち上がり
(3D)



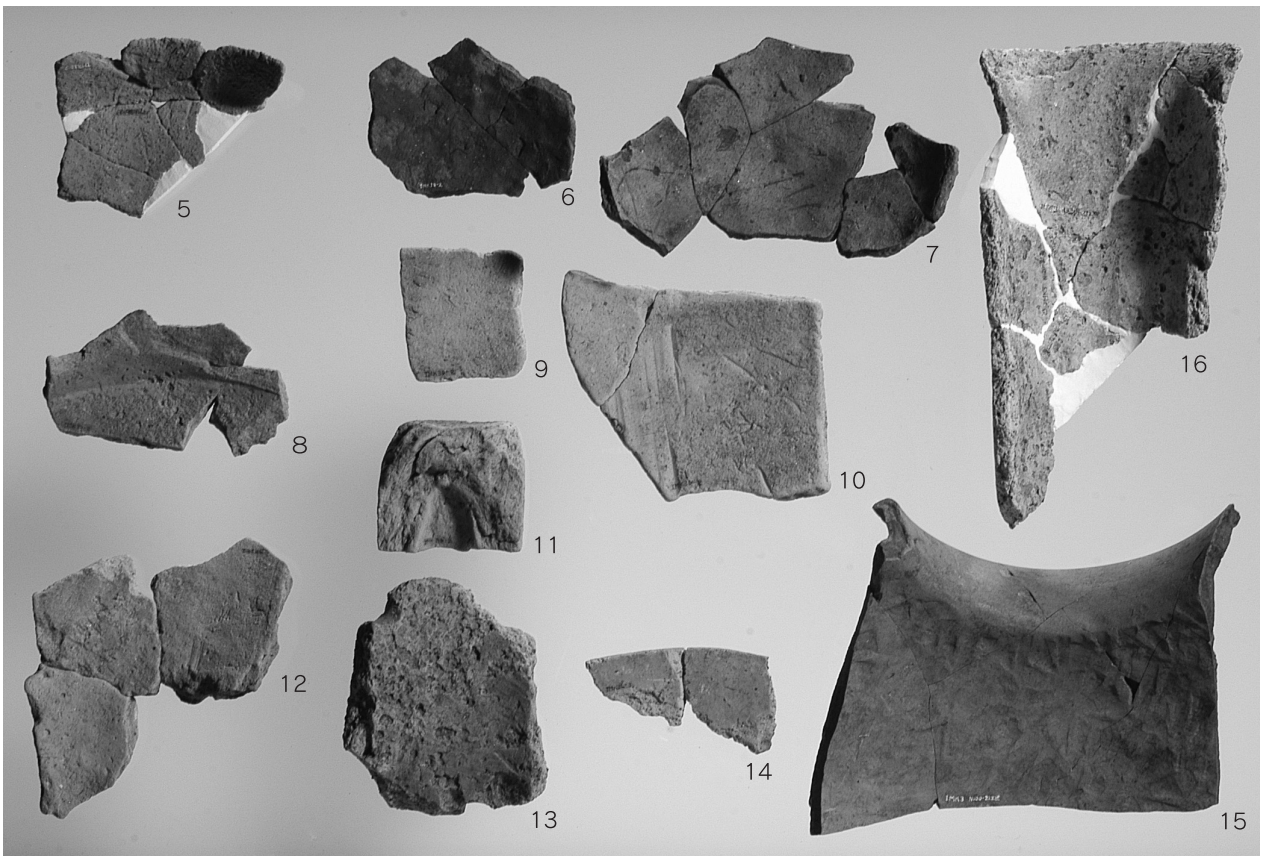
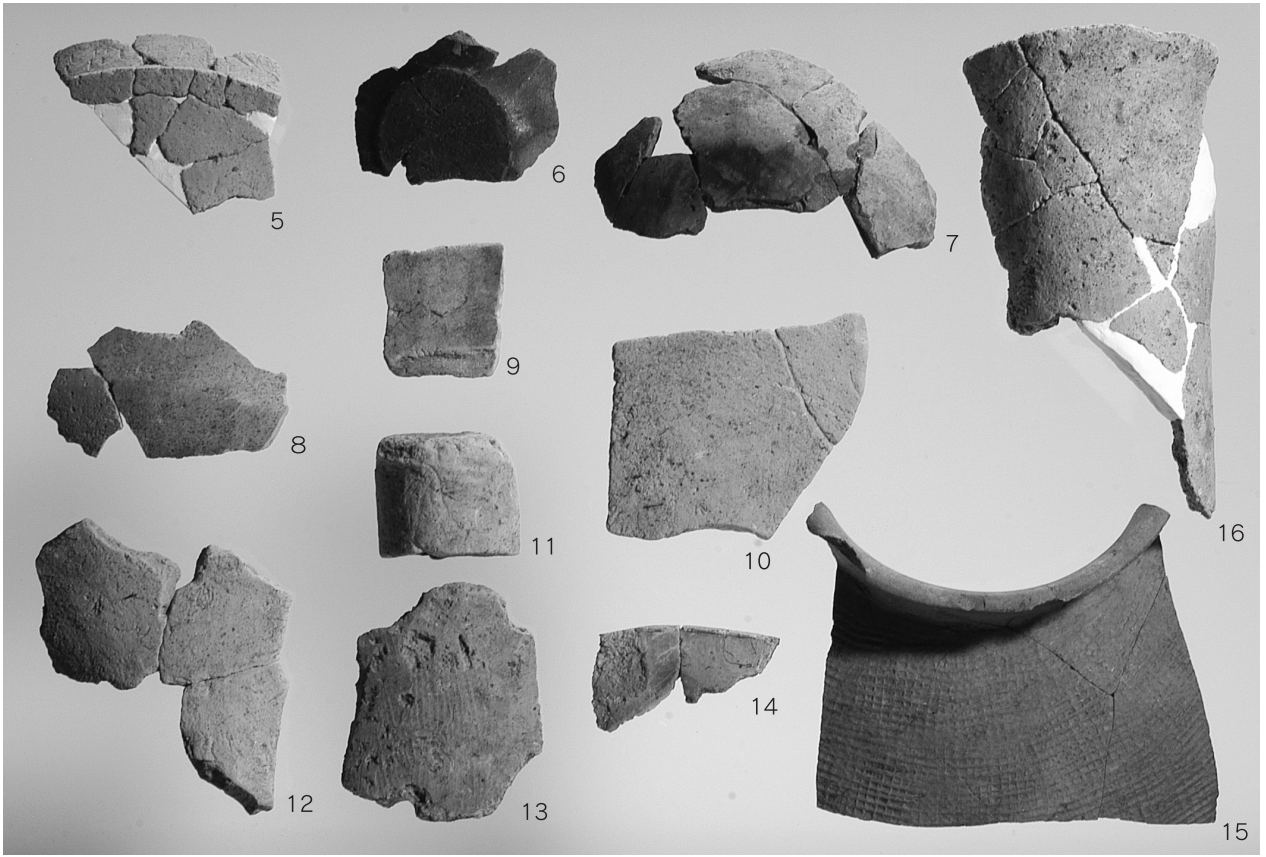
図版16
周溝立ち上がり
(3Q)



図版17
3P



図版18
3D-2



图版19 出土遺物(上:外面 下:内面)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いきめこふんぐんⅡ							
書名	生目古墳群Ⅱ							
副書名	生目3号墳発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第91集							
編著者名	稲岡洋道, 竹中克繁 (編集)							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
いきめこふんぐん 生目古墳群	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 おおあざあとえ 大字跡江	45201	24-059	31 57 0.7 付近	131 23 4.6 付近	1998.12.15 ～1999.3.31 1999.12.13 ～2000.3.31 2007.8.23～ 2007.10.18 2009.9.1～ 2009.10.13	519.4	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
生目3号墳	古墳	古墳時代	古墳	特になし		九州最大の前期古墳である前方後円墳の確認調査		

宮崎市文化財調査報告書 第91集

生目古墳群 II

— 生目3号墳発掘調査報告書 —

2012年3月

発行 宮崎市教育委員会